

シネマ日記



No. 78

○月×日 日本が台湾を統治していた1930（昭和5）年、中部山岳地帯の霧社で、台湾原住民が武装蜂起する事件が起きた。日本人警察官とのいざこざをきっかけに、日本では高砂族の呼び名もある原住民の霧社セデック族の男たち300人が駐在所を次々に襲った後、日本人小学校の運動会を襲撃、日本人136人を殺した事件である。この反乱に驚愕した日本の警察・軍隊は戦闘機や毒ガス弾まで繰り出し、報復せん滅を行った。だが、事件は偶発的に起きたものとして処理された。台湾総督府が自らの統治失敗の責任を問われることを恐れたからで、原住民たちの死者は10

00人以上とされるが、真相は闇に葬られた。この抗日暴動の顛末を2部構成、4時間半の大作として描いたのが「セデック・バレ」（台湾、ウエイ・ダーション監督）である。第一部「太陽旗」は、セデック族が弓矢と火縄銃で狩りをするシーンから始まる。険しい山深い森の中を、獲物を追って縦横に走り回る狩猟民族の彼ら。太古のままの神話的な世界に魅了される。彼らには首狩りの伝統がある。狩り場を守るために、集団間で敵対もするのだが、敵の首を狩ることで一人前の男として認められ、セデック・バレ（真の人の意）として崇められるのだ。死後はその真の人だけが先祖の待つ虹の橋の彼方に行けると信じられている…。だが1895年の日清戦争後、日本の統治が広がり、彼らの平穏な生活は奪われていく。日本人社会を作るために、彼らの生きる場だった森林は切り倒され、奴隷同様の使役の中で、誇りも文化もないがしろにされていく…。セデック族は蜂起、日本人への襲撃へ追い詰

められる。続く第2部「虹の橋」では、男たちは死後、その虹の橋を渡るためにも、絶望的な戦いに挑み、散っていくのだった。女たちもまた集団自決の道を選ぶ。戦いの悲惨さに、侵略者であった日本人としては心の痛む辛い映画であるが、それにも増して、彼らが太古からこの地で生きてきた民族としての誇り、尊厳、狩猟文化への深い思いが胸を打つ。娯楽性も十分な大活劇大作で、主人公の頭目役の俳優の男ぶりも魅力的。

○月×日 米デトロイトの場末で歌っていたロドリゲス。6枚しかアルバムが売れず、忘れられていた。が、時は流れ海を越え、なぜか南アフリカの地で大ヒット、人気アルバムになっていた。しかし、この地でも生死は不明、自殺伝説まで流れていた。その幻の歌手探しから、ドキュメンタリーは始まる…。そして「シユガーマン 奇跡に愛された男」（マリク・ベンジェルール監督）は確かにいたのだ。建設作業員の彼は、南アに行き「有名歌手」としてステージに立つ。国と時代を

超え奇跡を巻き起こした音楽の持つ共鳴力、一人の男がたどった人生の素晴らしさに、心が洗われた。長編ドキュメンタリー部門の本年度アカデミー賞受賞作。

○月×日 「リンカーン」（ステイブ・スピルバーグ監督）米国大統領は、南北戦争も北軍の勝利が確定的になった1865年、連邦議会で奴隷制廃止の憲法修正案の可決に画策する。南軍との講和で妥協を強いられる前に可決してしまおうと、様々な手練手管を用いての議会工作。理想の実現に向かっての、したたかな現実政治家ぶりを見せる。ダニエル・デイルイスが本場のリンカーンはかくや、と思わせる。

○月×日 「海と大陸」（エマヌエーレ・クリアレーゼ監督）は、地中海に浮かぶイタリアの小島に、アフリカから小舟に乗って難民が押し寄せている現実を題材にしている。難民の母子を助け、かくまうことになった漁師の一家だが、見つければ処罰される。人間としての良心、生き様が問われるのだった。（内藤哲